

日英語会話における会話参加者の社会的関係とバックチャネルの使い分けの考察

小林 かおり

1. はじめに

本研究では、日英語会話における教師と学生という異なる社会的地位に立っている会話参加者の自然会話を用い、会話参加者間の社会的関係とバックチャネルの使用状況を分析し、社会的要因が日英語会話におけるバックチャネル使用に及ぼす影響について考察する。

会話における聞き手の行動について、様々な研究がされてきた。特にバックチャネルは会話進行上、重要な機能を持っているとされ、多くの研究者の注目を集めてきた。バックチャネルとは、話し手が発話している間に聞き手が送る短いメッセージのことである。具体的にどのような聞き手の行為がバックチャネルとされるか、バックチャネルの定義や条件は研究者によって異なるが、相手の話を聞いていることを示す「うん」、「はい」、「Yeah」、「Uh-huh」の様な聴覚的に相手に伝わる言語的バックチャネルや、視覚的に認識できる頭の動き、つまり頷きによる非言語的バックチャネル、あるいはこれら言語的バックチャネルと非言語的バックチャネル両方の同時使用が挙げられる。特に日本語会話で聞き手が送る短い音声メッセージや頷きを「あいづち」と呼ぶことがあるが、ここでは英語会話との比較のためバックチャネルと呼ぶこととする。

バックチャネルという現象については、これまでも様々な観点から研究されてきた。Maynard (1986, 1992) やClancy et al. (1996) らによると、日英語会話におけるバックチャネルの使用状況を比較すると、英語話者の会話よりも日本語話者の会話でより多くのバックチャネルが観察されている。バックチャネルの頻度の高さは日本語会話の特徴の一つと言える。

また、バックチャネルの種類とその生起位置の相関関係についても研究されている。Kobayashi (2010) は、非言語的バックチャネル、言語的バックチャネル、非言語・言語的バックチャネルの同時使用の3種類に分類し、それぞれが会話のどこで現れるかを日英語会話で比較した。その結果、日英語会話共に非言語的バックチャネルのみは話し手の発話中、言語的バックチャネルのみは文末で多く生起した。また、非言語・言語的バックチャネルの同時使用は日英語会話ともに話し手が最後まで発話し終えてから生起しているが、それに加え日本語会話ではPPU (Pause-bounded Phrasal Unit) という短いポーズで区切られる単位の終わり、且つ文中でも同じくらいの頻度でバックチャネルが生じた。

しかし、上述の研究では親しい者同士の会話データを使用しており、会話参加者間の人間関係、つまり社会的要因が与える影響は考慮されていない。従って、話し手と聞き手がどのような関係

であっても同じ事が言えるのか明らかではない。

会話参与者同士の人間関係に焦点を当てた研究としては、杉戸(1987)が挙げられる。杉戸(1987)は初対面の会話参与者の談話と、昔からの知人同士の談話を比較している。その結果、後者よりも前者の談話においてあいづちが多く生起し、疎の関係にある者同士の会話において、お互いに相手の話を聞いていることを表現することが必要であることをその理由として述べている。

疎の関係の者同士のバックチャネルの研究として、他にも宮崎(2002)が挙げられる。宮崎(2002)は日本語会話で親の関係のグループと疎の関係のグループのバックチャネルの使用を比較した。対面と電話での会話を分析し、あいづちの頻度が話し手と聞き手の年齢差の影響を受け、「聞き手は話し手の方が年長の時にはあいづちを頻繁に使って「聞いている」ということを示す必要があるが、年上の聞き手はそれほど頻繁にあいづちを送らなくてもいい」という見解を示している。

このように、バックチャネルの実態を解明するため、会話参与者間の社会的関係という観点から研究がなされている。しかしながら、それでもなお、上下関係とバックチャネル使用の関係についてまだ明らかにされていない点も多く存在する。特に、上記に紹介した様に上下関係がバックチャネル使用に与える影響という点で、日英語会話で比較することで新たな発見があるかもしれない。また、バックチャネルには言語的なものと頷きの様な非言語的なものもあり、それらのバリエーションを会話参与者がどのように選択するのか、その選択方法は会話参与者の上下関係に影響されるものなのか研究の余地がある。本研究では、日英語会話の参加者間の上下関係と使用されるバックチャネルの形態の関係について考察し、会話参与者の社会的関係という観点から日英語会話におけるバックチャネルの使用について明らかにしたい。

2. バックチャネルの定義

バックチャネルの対象となるものは研究者によって異なるため、本研究でのバックチャネルの定義を明確に示す必要がある。本研究において、非言語的バックチャネルは頭の動きを指し、聞き手の頷きが対象となる。言語的バックチャネルは日本語では「あいづち」と呼ばれる「うん」や「あー」、英語では“uh-huh”や“hm”といった非語彙的な短い発声と、Clancy et al. (1996)が reactive expressions (反応発話)と呼んでいるような「はい」、「ほんと」、「yeah」や“oh really”といった語彙的な発声を含む。非言語的バックチャネルと言語的バックチャネルはそれぞれが単独で使用されることもあれば、2つ同時に使われることもある。本論ではバックチャネルを①非言語的バックチャネル、②言語的バックチャネル、③非言語的バックチャネルと言語的バックチャネルの両方の3種類に分類して分析する。

3. 分析方法

3.1 データ

本研究では、ミスター・オー・コーパスの自由会話を使用する。このデータは女性の教師と学生が二人一組となり、「びっくりしたこと」というテーマに沿って自由に会話をしている場面を録音・録画したものである。発話は文字化されている¹⁾。本研究では言語的バックチャネルだけ

でなく、視覚的に観察される非言語的バックチャネルも観察するため、このデータを使用することで自然な会話を分析できると考えられる。

3.2 分析の手順

日英語会話でのバックチャネルの分析を行うにあたり、まずは前述の定義に従い、聞き手の立場にある会話参加者が使ったバックチャネルをピックアップする。そして、それらの種類（非言語的バックチャネルのみ、言語的バックチャネルのみ、言語的・非言語的バックチャネルの同時使用の3種類）と出現位置（文法的区切り、ポーズ、発話中の3種類）を分類した上で頻度を示す。これらの手順から得られた結果を基に、日英語会話におけるバックチャネルの使用状況を数量的に分析し、考察したい。

4. 分析結果

4.1 バックチャネルの頻度

ここでは日英語会話で現れた3種類のバックチャネルの全体的な頻度を考察する。表1に示されているのは日英語会話で観察されたバックチャネルの頻度である。

表1. 日英語会話における3種類のバックチャネルの頻度

バックチャネルの種類	日本語	英語
非言語的バックチャネルのみ	336 (35.44%)	259 (37.92%)
言語的バックチャネルのみ	105 (11.08%)	212 (31.04%)
非言語・言語的バックチャネル両方	507 (53.48%)	212 (31.04%)
合計	948 (100%)	683 (100%)

まず、全体的な頻度に着目すると日本語会話では合計948回のバックチャネルが送られているのに対し、英語会話では683回のバックチャネルが観察された。英語会話で聞き手が使ったバックチャネルは日本語会話でのバックチャネル全体の約70%となっている。これはこれまでの研究結果(Clancy et al. 1996、Maynard 1986、1993等)と同様、英語会話よりも日本語会話の方がより多くのバックチャネルが送られるという結果と一致する。

バックチャネルの種類別に頻度を見ると、日本語会話では非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使用した回数が507回で、3種類のバックチャネルの中で最も多く観察され、日本語会話で見られたバックチャネル全体のおよそ半数を占めている。続いて非言語的バックチャネルのみが336回、言語的バックチャネルが105回観察された。日本語会話では言語・非言語的バックチャネルの同時発生が圧倒的に多く使われることが明らかとなった。

それに対して英語会話では、日本語会話で2番目に多かった非言語的バックチャネルのみが259回で3種類のバックチャネルの中で最も頻度が高い。そして言語的バックチャネルのみと言語・

非言語的バックチャネルの同時発生がそれぞれ212回、同じ頻度で現れている。また、最も頻度が高い非言語的バックチャネルのみと、他の2つそれぞれの割合は37.92%と31.04%となっており、日本語会話と比べると3種類のバックチャネルの間での差がさほど大きくはないことがわかる。

4.2 教師と学生それぞれのバックチャネル使用頻度

日英語会話での教師と学生それぞれのバックチャネルの使用状況を分析する。両言語において教師が学生のターン中に、そして学生が教師のターン中に使用した3種類のバックチャネルの頻度を示す。

4.2.1 日本語会話の分析結果

まずは日本語会話での結果を見たい。表2に示したのは日本語会話で教師と学生がそれぞれ聞き手の役割を担っていた際に使用した3種のバックチャネルの使用頻度である。

表2. 日本語会話で教師と学生それぞれが使った3種類のバックチャネルの頻度

バックチャネルの種類	教師	学生
非言語的バックチャネルのみ	76 (22.49%)	260 (42.62%)
言語的バックチャネルのみ	48 (14.20%)	57 (9.34%)
非言語・言語的バックチャネル両方	214 (63.31%)	293 (48.03%)
合 計	338 (100%)	610 (100%)

日本語会話での教師と学生それぞれが使った3種類のバックチャネルの合計を見ると、教師が合計338回、学生が610回のバックチャネルを使用している。教師と学生のそれぞれが使ったバックチャネルの内訳は、多かった順に非言語・言語的バックチャネルの同時使用、非言語的バックチャネルのみ、言語的バックチャネルのみとなり、教師と学生で共通して同じ順位となった。非言語・言語的バックチャネルの同時使用は教師が214回使っており、63.31%を占めているため半数以上のバックチャネルがこのタイプである。学生は293回使用し、全体の約半数を占めている。2番目に多かった非言語的バックチャネルのみは、教師が76回の使用で約22%を占め、学生は260回の使用で約43%を占めた。学生の場合は非言語的バックチャネルのみと、非言語・言語的バックチャネルの同時使用の2種類の頻度・割合に大きな差がないことがわかる。そして、最も頻度が低かったのが言語的バックチャネルのみであり、教師が48回(14.20%)、学生が57回(9.34%)観察された。

4.2.2 英語会話の分析結果

ここでは英語会話の分析結果を見ていく。表3に英語会話において教師と学生のそれぞれが使用した3種類のバックチャネルの使用頻度が示されている。

表3. 英語会話で教師と学生それぞれが使った3種類のバックチャネルの頻度

バックチャネルの種類	教師	学生
非言語的バックチャネルのみ	129 (39.94%)	130 (36.11%)
言語的バックチャネルのみ	94 (29.10%)	119 (33.06%)
非言語・言語的バックチャネル両方	100 (30.96%)	111 (30.83%)
合計	323 (100%)	360 (100%)

3種類のバックチャネルの合計は、教師が323回、学生が360回であった。教師よりも学生の方がバックチャネルを使うことが多いが、日本語会話程の差は見られなかった。

教師と学生それぞれが使ったバックチャネルの内訳を詳細に見ると、教師が最も多く使ったのが非言語的バックチャネルのみであり、129回観察され、全体の39.94%をしめている。続いて頻度が高かったのが非言語・言語的バックチャネルの同時使用であり、100回使われ、全体の30.96%を占める。そして最も頻度が低かったのが言語的バックチャネルのみであり、94回観察され、29.10%を占めていた。

学生が教師に対して使用したバックチャネルを分析すると、教師と同様に非言語的バックチャネルのみが最も多く観察された。頻度は130回で、全体の36.11%となった。その次に多かったのが、教師が最も少なく使用していた言語的バックチャネルであり、119回(33.06%)観察された。そして最も頻度が低かったのは非言語・言語的バックチャネルの同時使用であり、111回(30.83%)使われた。日本語会話と異なり、英語会話では教師と学生共に、使用した3種類のバックチャネル間の頻度の差がそれほど小さくなく、3種類とも比較的均等に出現していることが分かる。

4.3 バックチャネルの出現位置

本研究で観察されたバックチャネルの出現位置を「文法的区切り」、「発話中」、「ポーズ」の3種類に分類した。「文法的区切り」は文、句、節の終わりや、日本語会話では「ね」、「よ」といった終助詞が現れた時を指す。「発話中」とは、話し手の発話中にバックチャネルが発話にオーバーラップする形で送られる時のことを示し、「ポーズ」は話し手のターン中に話が止まり、何も発話されない場合である。本研究では、バックチャネルの出現位置は話し手のターン中のどの時点から聞き手のバックチャネルが始まったかを分析するため、話し手の発話と聞き手のバックチャネルがオーバーラップしていたとしても、バックチャネルの開始時点が文・句・節末や助詞の後である場合は文法的区切りと分類する。

バックチャネルが現れた位置の全体的な頻度を表4に示した。日本語会話で最も多かったのが話し手の発話中で、およそ半数のバックチャネルが話し手の発話にオーバーラップする形で送られた。次に多かった文法的区切りは44.83%を占め、発話中の48.00%と近い結果となった。ポーズでは68回のバックチャネルが観察され、7.17%という割合となった。

英語会話で最も多くバックチャネルが送られていたのは、日本語会話では2番目に頻度が高かった文法的区切りである。文法的区切りの位置でバックチャネルが372回観察され、半数以上のバックチャネルがこの位置で現れたことになる。続いて多かった位置は、日本語会話で最も多かった

発話中で、256回(37.48%) 観察された。そして最も頻度が低かった位置は日本語会話と同様、ポーズであった。日本語会話と同様、10%を切る8.05%の出現率であった。

表4. 日英語会話におけるバックチャネルの出現位置の頻度

位置	日本語	英語
文法的区切り	425 (44.83%)	372 (54.47%)
ポーズ	68 (7.17%)	55 (8.05%)
発話中	455 (48.00%)	256 (37.48%)
合計	948 (100%)	683 (100%)

4.3.1 日本語会話における先生と学生それぞれのバックチャネル使用位置

実際に教師と学生それぞれが会話中、いつバックチャネルを送っていたか詳細に分析をする。まずは日本語会話のデータを示す。表5は、日本語会話での教師と学生がバックチャネルをいつ送っていたか頻度を表している。

表5. 日本語会話における教師と学生が使ったバックチャネルの出現位置の頻度

位置	教師	学生
文法的区切り	171 (50.59%)	254 (41.64%)
発話中	143 (42.31%)	312 (51.15%)
ポーズ	24 (7.10%)	44 (7.21%)
合計	338 (100%)	610 (100%)

教師が使った合計338回のバックチャネルが観察された内訳を分析すると、文法的区切りが最も多く、半数がこの位置で現れたことがわかる。次に多かったのが発話中であり、約4割のバックチャネルが話し手の発話にオーバーラップする形で観察された。そして最も頻度が低かったのがポーズであり、24回観察された。一方、学生は合計610回のバックチャネルを使用し、学生が最もバックチャネルを頻繁に使っていた位置は発話中であり、半数を占めている。続いて文法的区切りが254回(41.64%)、ポーズが44回(7.21%) 観察された。日本語会話では教師よりも学生の方が圧倒的に多くバックチャネルを使用し、教師と学生がバックチャネルを使う位置に違いが見られるようである。

4.3.2 教師が使ったバックチャネルと出現位置

日本語会話において、教師は学生のターン中の3種類の位置のうち、どのバックチャネルを選択するのだろうか。その分析結果を示したのが表6である。

(2) では学生Sが自分自身の就職活動の経験について語っている。T1とT2の2つが学生の発話中に教師Tが使った非言語的・言語的バックチャネルの同時使用である。T1は「ええ」という言語的バックチャネルと非言語的バックチャネルである頷きが2回連続して同時に起こっている²⁾。T2は「うん」という非言語的バックチャネルと頷きから成っている。T1は学生の「受けてても」の「てても」、T2は「落とされちゃうんですよ」の「され」に重なって生じている。発話が「受け」、「落と」で終わることはないので、学生が試験を受けたことと落とされたことを言い終える前に、教師が学生の言おうとしていることを予測し、即座にバックチャネルを送っていると考えられる。

教師は非言語・言語的バックチャネルの両方を学生の発話中にポーズが生じた時にも最も頻繁に選んでいた。その例を抜粋(3)に示す。

(3) J11

1 S: なんか、そういう話を聞くと / こういうこともびっくりしたんだなー、

/ (T1: H)

2 S: とか思うんですけど / なんか、自分[が]、その、普段生活してて、はっとか思っても、

/ (T2: H)(T3: [H])

3 S: すぐ、なんか、それが日常化されちゃって (0.2秒) //

→// ((T4: うんうん))

H H

4 S: 忘れちゃう。[笑い]

上記の会話では、学生Sが普段驚くことがあってもすぐに忘れてしまうため、びっくりしたことというテーマで話すのがなかなか難しいことを述べている。3行目の学生の「日常化されちゃって」という発話の直後にポーズが生じ、教師が「うん、うん」という言語的バックチャネルを頷きながら使っているのが観察された。このT4がポーズで使われたバックチャネルの一例である。「日常化されちゃって」の後に何かしらの発話が続くと予想されるが、学生がすぐに発話しなかったため、その沈黙を埋めるようにして教師がバックチャネルを使っているように見て取れる。

4.3.3 学生が使ったバックチャネルと出現位置

次に、日本語会話で学生が使ったバックチャネルの種類と位置の関係を分析する。表7にその結果を示す。それぞれの位置で使われたバックチャネルの内訳を見ると、文法的区切りでは頻度が高い順に非言語・言語的バックチャネルの同時使用が151回 (59.45%)、続いて非言語的バックチャネルのみが77回、言語的バックチャネルのみが26回観察された。発話中とポーズでは非言語的バックチャネルがそれぞれ161回 (51.60%)、22回 (50.00%)、非言語・言語的バックチャネルの同時使用が127回、15回、言語的バックチャネルのみが24回、7回出現した。

表7. 日本語会話で学生が使ったバックチャネルとその位置の頻度

バックチャネルの種類	文法的区切り	発話中	ポーズ
非言語的バックチャネル	77 (30.31%)	161 (51.60%)	22 (50.00%)
言語的バックチャネル	26 (10.24%)	24 (7.69%)	7 (15.91%)
非言語的・言語的バックチャネル両方	151 (59.45%)	127 (40.71%)	15 (34.09%)
合計	254 (100%)	312 (100%)	44 (100%)

下記の会話データ(4)では、文法的区切りで多く観察された非言語・言語的バックチャネルの同時使用と、発話中に多かった非言語的バックチャネルのみの使用例を示す。ここでは教師Tが授業をしていた際に驚いた体験を話している。

(4) J05

1 T: で、なるべく顔と名前をお、覚[えて]、

→(S1: [HH])

2 T: そいで、それから授業を始めるようにするん [ですけれども]、

→(S2: [H H H])

3 T: で、でも、5月の時点だからみんな学生の顔と名前覚えちゃって/

→/ ((S3: はい))

H

4 T: もう、あ、インプットされているんだけど

教師の1行目と2行目の発話の際に非言語的バックチャネルのみが使われている。S1は2回の連続した頷きが教師の「覚えて」という発話の「え」と「て」にオーバーラップする形で出現している。また、S2は頷きが3回連続で教師の「です」、「けれ」、「ども」という発話に重なる形で観察された。1行目の「覚(おほ)えて」は、直前の「覚(おほ)」だけでは文法的に区切ることはできず、また2行目の「するんですけれども」も「するん」では発話の区切りとは判断できないため、S1とS2のいずれも教師の発話中に使われたと見なされる。

また、文法的区切りで最も多く使われていた非言語・言語的バックチャネルの同時使用の例がS3である。教師が「覚えちゃって」と発話した直後に学生が「はい」という言語的バックチャネルと頷きの非言語的バックチャネルを同時に使用した。句末の「て」というのは接続助詞であり、この後もまだ教師の発話が続くことが予測できる。従ってS3が現れた位置を文法的区切りと分類できる。

教師の発話中に生じたポーズで学生が最も多く使っていたのが非言語的バックチャネルである。その使用例を抜粋(5)に示す。この会話では、教師と学生がそれぞれ過去に電車内で見かけた光景について話している。

(5) J01

1 T：ん、ただ独り言のようにぶつぶつ言ってる人とかは [いますよね]

2 S： [いますよね]

3 S：でもね/

/ ((T1：そう))

H

4 T：それはなんなんだろうって (0.3秒) //

→// (S1：H)

5 T：なんかびっくりするって言うより怪しいっていう。

4行目で教師が「それはなんなんだろうって」と発話した後に短いポーズが生じ、学生がS1を送った。S1は1回の額きから成っている。S1の直前の教師の発話は「て」という接続助詞で止まっており、教師がまだ発話を続けることが予想されたため、学生は教師の発話の続きを待っていた。しかし、教師が直ぐに話を続けずにポーズが起こったため、その沈黙を埋めるかのように学生が非言語的のバックチャネルを使っている。

以上の日本語会話での分析により、下記の結果が得られた。

- ①教師よりも学生の方が頻繁にバックチャネルを送る (表1)。
- ②教師、学生共に頻繁に使うバックチャネルの種類は同じであり、非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使うことが最も多い。しかし、教師よりも学生の方が非言語的バックチャネルのみの割合が2倍近く高い (表2)。
- ③教師は3種類のどの位置でも非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使うパターンが最も多い (表6)。また、3種類の位置の中では文法的区切りでバックチャネルが最も多く送られた。
- ④学生は位置によって使うバックチャネルの種類が異なる (表7)。文法的区切りでは非言語・言語的バックチャネルの両方、発話中とポーズでは非言語的バックチャネルのみを多用する。3種類の位置の中では、発話中にバックチャネルを送ることが最も多い。

このような結果から、日本語会話では教師と学生のバックチャネルの使用法が異なっていることがわかる。

4.3.4 英語会話における先生と学生それぞれのバックチャネル使用位置

日本語会話では教師と学生のバックチャネル使用に違いが見られたが、英語会話ではどのような結果が得られるだろうか。表8に英語会話において教師と学生それぞれがバックチャネルを使った3点の位置の頻度を表す。

表8. 英語会話における教師と学生が使ったバックチャネルの出現位置の頻度

位置	教師	学生
文法的区切り	174 (53.87%)	197 (54.72%)
発話中	120 (37.15%)	137 (38.06%)
ポーズ	29 (8.98%)	26 (7.22%)
合計	323 (100%)	360 (100%)

英語会話では教師が合計323回、学生が360回のバックチャネルを送っている。教師と学生それぞれがバックチャネルを送った位置を分析すると、頻度の高い順に文法的区切り、発話中、ポーズという共通した結果が得られた。最も多かった文法的区切りでは、教師と学生それぞれ174回、197回のバックチャネルが観察され、教師と学生共に全体のおよそ半数を占めている。2番目に多かった発話中では、教師が送ったバックチャネルは120回(37.15%)、学生の場合は137回(38.06%)であった。そして最も頻度が低い位置がポーズであり、教師と学生共に約7%から9%の使用率である。これらの結果から、英語会話では教師、学生共にバックチャネルを頻繁に送る位置が同じであることと、教師と学生それぞれのバックチャネルの総数には日本語会話ほどの差がないことがわかる。

4.3.5 教師が使ったバックチャネルと出現位置

教師と学生それぞれの結果を見ていく。表9に英語会話において教師がそれぞれの位置でどのバックチャネルをどの程度使ったのか、その頻度を示す。合計を見ると、文法的区切りでバックチャネルが合計174回使われ、発話中の120回、ポーズでの29回と比べて最も多いことがわかる。また、これらの内訳を詳細に分析すると、文法的区切りでは非言語・言語的バックチャネルの同時使用が67回(38.51%)、言語的バックチャネルのみが66回(37.93%)となっており、2つのタイプがほぼ同程度の割合で観察された。発話中とポーズでは非言語的バックチャネルのみが最も頻繁に使われ、それぞれ約6割を占めている。

表9. 英語会話で教師が使ったバックチャネルとその出現位置の頻度

バックチャネルの種類	文法的区切り	発話中	ポーズ
非言語的バックチャネル	41 (23.56%)	71 (59.17%)	17 (58.62%)
言語的バックチャネル	66 (37.93%)	20 (16.67%)	5 (17.24%)
非言語・言語的バックチャネル両方	67 (38.51)	29 (24.17%)	7 (24.14%)
合計	174 (100%)	120 (100%)	29 (100%)

実際に英語会話で教師がバックチャネルを送っていた場面を紹介する。データ(6)では、学生Sが留学している日本での学生生活について話している。教師Tが文法的区切りで最も頻繁に使った言語的バックチャネルのみと、非言語・言語的バックチャネルの同時使用の例を示す。

(6) E15

1 S : And I came early for, um (1.2秒)

2 S : some Japanese study/ [since I]'d only had a semester in America,
→/ ((T1 : [Uh-huh]))

H

3 S : so, I mean, I still don't know very much/ but it's really awful/ {笑い}

→/ ((T2 : Uh-huh)) →/ (T3 : Yeah)

H

ここでは教師が3回バックチャネルを送っている。T1とT2は'Uh-huh'という言語的バックチャネルと非言語的バックチャネルである。T1は'some Japanese study'という句末と'I still don't know very much'という文節の直後に同時に現れた。またT2は'but it's really awful'という文節の直後に観察された。従って、これら3つのバックチャネルは文法的区切りの位置で使われたこととなる。

続いて、発話中に最も多く使われていた非言語的バックチャネルの使用例を(7)に示す。学生Sが自分自身の興味関心について教師Tに話している。

(7) E03

1 S : I started listening to some Ja[panese] music, and really liking it.

→(T1 : [H H])

2 S : And, you know, I heard this music, and I was thinking, you know,

3 S : I kind of wanna play guitar.

教師Tは学生が'Japanese'という語の初めの音節である'Ja'を発した直後に、非言語的バックチャネルを使っている。この時点では1行目の'listening to'の内容がまだ定かでないため、教師は相手の話を聞いていることを示すために非言語的バックチャネルを使ったと言える。

ポーズでも教師は非言語的バックチャネルを最も頻繁に使っていた。その例が抜粋(8)である。この会話では学生Sが日本に来て驚いたことを話している。

(8) E15

1 S : Cuz I think I know they take a lot of English in school here, but (0.2秒) //

→// (T1 : HH)

2 S : a lot of people, really don't speak any, so (1.9秒) // or just numbers maybe.

→// (T2 : HHH)

1行目の'but'と2行目の'so'の後、学生が次の言葉を選ぶのに時間がかかり、短いポーズが観察された。そのポーズの際にT1とT2が生起している。T1は2回、T2は3回の連続した頷き、つまり非言語的バックチャネルから成っている。

4.3.6 学生が使ったバックチャネルと出現位置

英語会話での学生のバックチャネル使用状況を表10に示した。文法的区切りでは合計197回、発話中に137回、ポーズで26回のバックチャネルが観察され、英語会話での教師の結果と同様に文法的区切りでバックチャネルが多く使われることがわかる。

表10. 英語会話で学生が使ったバックチャネルとその出現位置の頻度

バックチャネルの種類	文法的区切り	発話中	ポーズ
非言語的バックチャネル	44 (22.34%)	74 (54.01%)	12 (46.153%)
言語的バックチャネル	79 (40.10%)	31 (22.63%)	9 (34.62%)
非言語・言語的バックチャネル両方	74 (37.56%)	32 (23.36%)	5 (19.23%)
合計	197 (100%)	137 (100%)	26 (100%)

文法的区切りの位置で最も多く使われているのが言語的バックチャネルである。言語的バックチャネルは、文法的区切りで送られたバックチャネルの合計197回中、79回現れており、40.10%を占めている。また、言語的バックチャネルのみと僅差で言語的・非言語的バックチャネルの同時使用が74回(37.56%)観察された。それら2種類のバックチャネルの使用例を(9)に示す。

(9) E11

1 T : I, ah, I, I still remember I had a friend just last week,

2 T : I hadn't seen him in six years/

→/ (S1 : Oh wow)

3 T : and, um, we were at [Shibuya] crossing/ and he's across the street, 'Jennifer.'

→ (S2 : [H H H]) →/ ((S3 : Uh-huh))

H H

(9) では教師Tが日本で偶然知り合いに会った時のことを語っている。この会話の中で、学生Sは2ヶ所の文法的区切りの位置でバックチャネルを使った。1つ目は教師の2行目の発話'I hadn't seen him in six years'という文末で、S1に示される'Oh wow'という言語的バックチャネルのみの形式が観察された。2つ目はS3の'Uh-huh'という言語的バックチャネルと、2回の頷きから成る非言語的バックチャネルの同時使用である。これは教師の'we were at Shibuya crossing'という文末で使われた。これらの位置は2つとも文法的な一つのまとまりとして考えられるため、文法的区切りであると言える。

英語会話で教師の発話中に最も頻繁に使われていたバックチャネルの種類は非言語的バックチャネルのみであった。教師の発話中に学生が使った137回のバックチャネルのうち、非言語的バックチャネルのみが74回(54.01%)を占めていた。非言語・言語的バックチャネルの同時使用は32回(23.36%)、言語的バックチャネルは31回(22.63%)観察された。

上記の抜粋(9)に、発話中に多く使われていた非言語的バックチャネルのみの使用例を示す。

教師の3行目の‘Shibuya’という発話と重なるようにして領きが3回連続で観察されている。非言語的バックチャネルであるS2は、‘We were at’という、文末でも句末でもない時点から始まっているため発話中と分類できる。

教師のターン中に現れたポーズの際に使われたバックチャネルは合計で26回であった。その中でも最も使われていたのが非言語的バックチャネルであり、全体の約半数を占めていた。言語的バックチャネルのみは9回、非言語・言語的バックチャネルの同時使用は5回観察された。抜粋(10)に、最も多く使われた非言語的バックチャネルの使用例を示す。

(10) E15

1 T : They'll have a (2.3秒) // they definitely have a, um (2.3秒)

→// (S1 : HH)

2 T : I'm trying to remember the [Ja] panese words, a, *hone* and *tate*,

(S2 : [H])

3 T : ah, I forget anyway, um, an honest side and then, a (1.9秒)

4 T : a (1.3秒) // more closed, um (2.2秒) //

// (S3 : Oh)

→// (S4 : HHHHH)

HH

この会話では教師Tが、日本人は自分自身の感情をあまり表現することがない事等、日本人の特性について言及している。1行目から4行目までの教師のターン中に5回のポーズがあり、そのうち2回のポーズの際に学生が非言語的バックチャネルを使っている。まず、1行目の‘They'll have a’という発話の後に観察されたポーズ時に、S1で示される2回の連続した領きが観察された。その次は4行目の‘more closed um’の後の短いポーズの後、5回の非言語的バックチャネルから成るS4が生じた。S4の前には教師が‘um’と発話していることから、教師が言いたい言葉が瞬時に出てこない状況であったと予想できる。これら一連の教師の発話から、1行目から4行目を通して教師は自分の言いたいことをなかなか適切に表現できずに言い淀んだことによりポーズが生じ、そのポーズの際に学生が非言語的バックチャネルを用いている。

4.4 分析結果のまとめ

これまでの分析を通し、日英語会話での教師と学生のバックチャネルの使用状況にいくつか相違点があることがわかった。まず、日本語会話では教師と学生のバックチャネルの使い方に違いが観察された。第一に、教師よりも学生の方が圧倒的に多くバックチャネルを送っていることが挙げられる。第二に、教師と学生のそれぞれがバックチャネルを使う位置に違いが見られた。教師はどの位置でも非言語・言語的バックチャネルの同時使用を多用するのに対し、学生は文法的区切りで非言語・言語的バックチャネルの同時使用を、発話中とポーズでは非言語的バックチャネルのみを用いることが多い。このように日本語会話における教師と学生の結果が異なることから、日本語会話でのバックチャネルの使用は、会話者間の社会的関係、つまり上下関係に何らかの影響を受けていると言える。

一方、英語会話においては教師、学生共に3種のバックチャネルを頻繁に使う位置が同じであることと、日本語会話の様に教師と学生のバックチャネルの使用状況に大きな違いがないことが明らかとなった。また、教師と学生が使うバックチャネルの総数間に日本語会話程の差がなかったことも特徴として挙げられる。そして、バックチャネルが生起する位置に関しても、教師と学生それぞれの結果が近いものであった。このように、英語会話では教師と学生のバックチャネルの使用状況に大きな相違がないことから、日本語会話の様に会話参加者間の社会的関係に影響を受けにくいと考えられる。

5. 考察

前章では日英語会話での教師と学生のバックチャネルの使用状況を数量的に分析し、その結果を示した。日英語会話の分析結果を比較するため、前章で提示した結果を表11にまとめる。

表11. 日英語会話でバックチャネルが送られた位置の頻度

位置	日本語		英語	
	教師	学生	教師	学生
文法的区切り	171 (50.59%)	254 (41.64%)	174 (53.87%)	197 (54.72%)
発話中	143 (42.31%)	312 (51.15%)	120 (37.15%)	137 (38.06%)
ポーズ	24 (7.10%)	44 (7.21%)	29 (8.98%)	26 (7.22%)
合計	338 (100%)	610 (100%)	323 (100%)	360 (100%)
	948 (100%)		683 (100%)	

表11より、バックチャネルの合計を見ると日本語会話では教師よりも学生の方が頻繁にバックチャネルを送っていることがわかる。また、頻繁にバックチャネルが送られる位置が教師と学生間で異なっている。教師は多い順に文法的区切り、発話中、ポーズとなっているのに対し、学生は発話中、文法的区切り、ポーズであった。英語会話では教師よりも学生の方がバックチャネルの総数が多いが、日本語会話ほどの差がないことがわかる。バックチャネルが送られる位置は教師も学生も共通して頻度が高い順に文法的区切り、発話中、ポーズとなっている。

また、表12にまとめたように日本語会話では教師と学生のバックチャネルの使い方に違いが見られた。教師は文法的区切り、発話中、ポーズのいずれの位置でも非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に多用する。水谷（1983）が述べている通り、日本語会話におけるバックチャネルは話し手が話しやすいように、話の進行を助長するためのものである。非言語的バックチャネルは視覚的に、そして言語的バックチャネルは聴覚的に聞き手が話し手の話を聞いている事や、話し手のターンを尊重していることを示す手段である。従って、教師がどの位置でも非言語・言語的バックチャネルの同時使用を選択することで、学生の話を知っていることや、学生のターンを尊重していることを視聴覚の双方向から明示的に、強調して示している。そうすることで教師は学生をサポートし、学生が話しやすい雰囲気を作り出している。

表12. 日本語会話における教師と学生がバックチャネルを送った位置の頻度

位 置	文法的区切り		発話中		ポーズ	
	教師	学生	教師	学生	教師	学生
非言語的 バックチャネル	28 (16.37%)	77 (30.31%)	43 (30.07%)	161 (51.60%)	6 (25.00%)	22 (50.00%)
言語 バックチャネル	29 (16.96%)	26 (10.24%)	13 (9.09%)	24 (7.69%)	3 (9.09%)	7 (15.91%)
両方の同時使用	114 (66.67%)	151 (59.45%)	87 (60.84%)	127 (40.71%)	15 (62.50%)	15 (34.09%)
合 計	171 (100%)	254 (100%)	143 (100%)	312 (100%)	24 (100%)	44 (100%)

一方、学生は教師の発話中とポーズで非言語的バックチャネルのみ、そして文法的区切りでは非言語・言語的バックチャネルの同時使用を頻繁に使っていた。つまり、学生は位置によってバックチャネルの種類を使い分けている。教師と異なり、学生は教師の発話中であれば話を遮らないようにしながら、教師の話を聞いていることとターンを尊重していることを非言語的バックチャネルの使用によって視覚的に伝えようとしている。また、ポーズの際には学生は発声せずに静かに教師が再び発話し始めるのを待ち、教師が話を続ける権利があることを示していると考えられる。そして、非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使用するのは文法的区切りの直後とし、教師の話を遮るのを最小限に止めようと努めながらも教師のターンを尊重していると思われる。学生は、このような形で教師の話に積極的に同調する姿勢を見せ、聞いているという事を示している。この日本語会話における学生の行動は植野（2012、2014）が述べているように、学生が教師に対して協調的な聞き手としての態度を示す行動を選択する傾向によるものであると考えられる。

日本語会話では教師と学生のバックチャネル使用に相違点があったが、英語会話では大きな違いが見られない。表11から、教師と学生が送ったバックチャネルの総数には日本語会話ほどの差がないことがわかる。また、英語会話での分析結果を表13にまとめた通り、英語会話では教師も学生も文法的区切りで言語的バックチャネルのみのと、非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使う頻度が発話中とポーズ時に比べて高い。特に非言語・言語的バックチャネルの両方の同時使用は、聞き手が話し手から一定の情報を受け取った後、視聴覚の双方から相手のメッセージを受信したことを明示する手段と考えられる。そして、発話中とポーズで非言語的バックチャネルが単独で多用されていたのは、自分の発声によって相手の発話を妨げてしまわないようにするためであり、できるだけ最小限の反応に止めている。そして、非言語的バックチャネルを送ることで相手に最後まで話す権利があることを認め、自分は相手の話を聞いていることを示している。

表13. 英語会話における教師と学生がバックチャネルを送った位置の頻度

位 置	文法的区切り		発話中		ポーズ	
	教師	学生	教師	学生	教師	学生
非言語的 バックチャネル	41 (23.56%)	44 (22.34%)	71 (59.17%)	74 (54.01%)	17 (58.62%)	12 (46.15%)
言語的 バックチャネル	66 (37.93%)	79 (40.10%)	20 (16.67%)	31 (22.63%)	20 (16.67%)	9 (34.62%)
両方の同時使用	67 (38.51%)	74 (37.56%)	29 (24.17%)	32 (23.36%)	29 (24.17%)	5 (19.23%)
合計	174 (100%)	197 (100%)	120 (100%)	137 (100%)	120 (100%)	26 (100%)

この分析結果から、英語会話におけるバックチャネル使用は会話参加者の社会的関係の影響を受けないと言える。これは英語母語話者が個々の独立性を重んじており (Iwasaki 1997)、人の話は最後まで黙って聞くものであると考えている (水谷 1988) ためだと言える。

日本語会話でのバックチャネル使用は会話参加者の上下関係という社会的要因から影響を受け、英語会話ではそうではないことが分析結果から明らかとなった。この違いは何によって生じるのだろうか。Kitayama and Markus (1991) や藤井・金 (2014) によると、西洋と東洋では自己の捉え方が異なっているという。東洋文化では自己と他者が互いに影響を与えながと同じ「場」を共有し、他者が自己に融合されているという「自他非分離、相互依存」(藤井・金：85) 的な概念を有している。それに対し、西洋文化では自己は完全に自立した存在であり (Kitayama and Markus 1991)、他者は分離して捉えられる「自他分離、相互独立」(藤井・金：85) 的思想を持っている。つまり、東洋文化の日本語母語話者は自他共に一丸となって相互行為を行い、西洋文化の英語母語話者間の相互行為は自立した個々の尊重を基盤として相互行為を行っている。

さらに、日本語会話に関して井出 (2005：19) は、日本語母語話者は「話し手の身分証明、相手との関係、発話の場にまつわるさまざまな情報を「的確に区別して」認識」し、日本語母語話者は相互行為においてわきまえて発話していると述べている。つまり、日本語会話では自分と相手との上下親疎関係によって自分がどう振る舞うか判断しているという。

本論の分析で得られた結果は、これらの事実から説明することができる。まず、英語会話よりも日本語会話で圧倒的に多くのバックチャネルが送られていたのは、日本語母語話者が話し手のターン中に多くのバックチャネルを送ることで積極的に会話に参加し、1つの「場」を他の会話参加者と共有しようとしていることと、英語母語話者は話し手の話を邪魔しないようにバックチャネルを最小限に送り、個人のターンを尊重しようとしていることが要因となっている。つまり、日本語会話での頻繁なバックチャネル使用は自他が影響し合い、一つの場を構築する「自他非分離、相互依存」(藤井・金：85) 的自己観、それに対し英語会話で観察された少ないバックチャネル使用は個人の自立を尊重しながら相互行為を行う「自他分離、相互独立」(藤井・金：85) 的自己観によるものだと言えるだろう。

また、日本語会話において教師よりも学生の方が頻繁にバックチャネルを送っていることも「自他非分離、相互依存」(藤井・金：85) 的に会話を進捗することがその理由と考えられる。「自他非分離、相互依存」(藤井・金：85) 的自己観を持つ日本語母語話者は、自己と他者が互いに影響しながら相互行為を行う。そして、植野 (2014) が指摘しているように教師と学生は対象依存

的に互いの役割関係を確認し合い、上下関係を維持・構築する。これらのことから、教室で学生が教師の話をよく聞くことを期待されるように、教室外でも学生は教師の話を聞いていることを示すために頻繁にバックチャネルを送った結果、教師よりも多くのバックチャネルを送ったと考えられる。

さらに、教師が学生の話の聞いている時にどの位置でも非言語・言語的バックチャネルの両方を同時に使うことが多いのは、植野（2014）が述べている通り教師は学生を助ける姿勢を示し、面倒見の良い、気遣いのある会話を展開しようとするからだと考えられる。非言語・言語的バックチャネルの両方の同時使用は、視聴覚の双方向から相手の話を聞いていることや、話を続けて良いというメッセージを送る手段であり、単に頷くだけの非言語的バックチャネルよりも、相手のターンを認めてサポートしていることを強調することができる。また、教師とは異なり学生が発話中とポーズで非言語的バックチャネルのみを多用する結果となったのは、学生が「学生」という社会的役割を認識し、教師の話を静かに聞くという姿勢を示すためだと考えられる。つまり、日本語会話では相手と自分の関係を認識し、自分の社会的役割をわきまえて相互行為を行うため、これらの教師と学生のバックチャネルの使用状況に違いが生じたと言えるだろう。

このように日英語会話を比較することで、それぞれの言語の母語話者がどのように相互行為を行っているかを見て取ることができる。日本語会話での教師と学生のバックチャネルの現象は、話し手と聞き手の間の社会的関係によって影響を受けることを明らかにした。日本語母語話者は話し手と聞き手がどのような関係にあるかを解釈し、相手が自分より上位か下位か、その判断によってバックチャネルの使い分けをしている。今回の分析により日本語会話で教師と学生のバックチャネルの使用状況が異なることが示されたが、これは日本語会話参加者が敬語表現の有無を判断するように、日本語会話ではバックチャネルの使用にも「わきまえ」という概念が通じている。

6. 結論

本論では日英語会話における教師と学生のバックチャネル使用を数量的に分析し、上下関係という社会的な要因がバックチャネルの使用にどのような影響を及ぼすか考察した。日本語会話では3種類のバックチャネルの頻度や、それらが多用される位置が教師と学生の間で異なることから、会話参加者の社会的関係がバックチャネル使用に影響を与えることが明らかとなった。それに対して、英語会話では日本語会話のように教師と学生のバックチャネルの使い方に大きな違いが観察されなかったことから、英語会話におけるバックチャネルという現象は会話参加者の社会的関係から影響を受けにくいことが分かった。

これらの日英語会話での結果の違いは、それぞれの言語の母語話者が相互行為においてどのように自己と他者を位置づけるか、つまり自己観の相違から生じるものであると言えるだろう。日本語母語話者は会話参加者と自分がどのような関係にあるか、自分がその相手に対してどう振舞うべきかをわきまえて相互行為を行っている。つまり、日本語母語話者は上下関係を一つの区切りとして相互行為を行っていることが分析結果より明示的に示された。それには自己と他者が同じ「場」を共有し、互いに影響し合うという、「自他非分離」(藤井・金：85)の自己観と、相手と自分の社会的関係をわきまえた自己観が大きく影響している。日英語会話のバックチャネル

の総数を比較した際に日本語会話で圧倒的に多くのバックチャネルが送られたこと、また、教師は非言語・言語的バックチャネルの両方を同時にどの位置でも使うのに対し、学生は3種類のバックチャネルを位置によって使い分けするという違いが生じたことは、これらの自己観が根底となり現れた結果である。

その一方、英語母語話者にとっては各個人の独立性に重きが置かれ、自己は完全に独立した存在であり、「自他分離」(藤井・金：85) の概念が根底となって相互行為を行っている。水谷(1988)が述べているように、英語母語話者にとっては相互行為の目的は情報交換であり、相手の話を最後まで黙って聞くことが期待されているため、英語会話でのバックチャネルの総数が日本語会話に比べて少なかったと言える。また、日本語会話とは異なり英語会話では各々の会話参加者が独立した存在と見なされ、バックチャネルの使用は上下関係に影響を受けないため、教師と学生間のバックチャネルの頻度や多用された種類や位置に大きな違いが見られなかった。

今回の分析ではバックチャネルの現れた位置を文法的区切り、発話中、ポーズの3種類に分類したが、話し手の発話のイントネーションや視線等、他にも様々な要因がきっかけとなってバックチャネルが発生している可能性もある。また、3人以上の会話参加者による相互行為においてはどのようなバックチャネルの使い方が見られるのか分析の余地がある。今後、多様な観点から更なるバックチャネルの考察が望まれる。

注

1) データの文字化にあたり、本論では下記のように表示する。

/ 文法的区切りでバックチャネルが観察された箇所

// ポーズ時にバックチャネルが観察された箇所

[] オーバーラップ

{笑い} 笑い

H 非言語的バックチャネル

() 言語的バックチャネル(単独)

(()) 非言語・言語的バックチャネルの同時使用

2) 同じバックチャネルが複数回、途切れることなく連続で生じた場合は1回とカウントする。

参考文献

- Clancy, Patricia M, Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, and Hongyin Tao. 1996. The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26. 355-387.
- 藤井洋子・金明姫. 2014. 課題達成課程における相互行為の言語文化比較 解放的語用論への挑戦—文化・インターアクション・言語— 井出祥子・藤井洋子(編) くろしお出版 pp57-90
- 井出祥子. 2005. 異文化コミュニケーション学 異文化とコミュニケーション 井出祥子・平賀正子(編) ひつじ書房 pp2-23
- 井出祥子. 2006. わきまへの語用論 大修館書店
- Iwasaki, Shoichi. 1997. The Northridge earthquake conversations : The floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 28. 661-693.
- Kita, Sotaro and Sachiko Ide. 2007. Nodding, aizuchi, and final particles in Japanese conversation : How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of Pragmatics* 39. 1242-1254.
- Kobayashi, Kaori. 2010. In Which Situation Are Backchannels Used? : A Comparison of Backchannels in Japanese and English. B. A. thesis. Japan Women's University.
- Markus, Hazel Rose and Shinobu Kitayama. 1991. Culture and the self : Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review* 98. 224-253.

- Maynard, Senko K. 1986. On back-channel behavior in Japanese and English casual conversations. *Linguistic* 24. 1079-1108.
- メイナード・K・泉子. 1992. 会話分析 くろしお出版
- 水谷信子. 1983. あいづちと応答 話し言葉の表現, 37-44.
- 水谷信子. 1988. あいづち論 日本語学, 7, 4-11.
- 宮崎幸江. 2002. 日本語の電話と対面会話におけるあいづち 小出記念日本語教育研究会論文集, 10, 71-86.
- 植野貴志子. 2012. 聞き手行動の社会言語学的考察—語りに対する聞き手の働きかけ— 日本女子大学文学部紀要, 61, 57-68.
- 植野貴志子. 2014. 問いかげ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係—日英語の対照を通して— 解放的語用論への挑戦—文化・インターアクション・言語— 井出祥子・藤井洋子(編) くろしお出版 pp91-121
- Yngve, Victor H. 1970. On getting a word in edgewise. *Papers from the sixth regional meeting of the Chicago Linguistic Society* 6. 657-677.